

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, kum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第30号

2018年4月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者:篠田 茜

多様性は神さまのアイディア

クララ 吉谷かおる (管区女性デスク・神戸教区)

自主研修を試み、北米を襲う冬嵐とともに上陸してから、早くも3カ月が経とうとしています。春休みに入って学生が姿を消したので、年明けに来た時と同じようにニューヘイブンのこの辺りをちょろちょろしているのは野良リスと私だけ。でも私は見た目も中身も一回りたくましくなっていると思います。寄る年波に飲み込まれそうになりながらも、イエール大学神学大学院(Yale Divinity School/YDS)で予定していた学業をすべて終えて、今は対岸に泳ぎ着いた気分です。



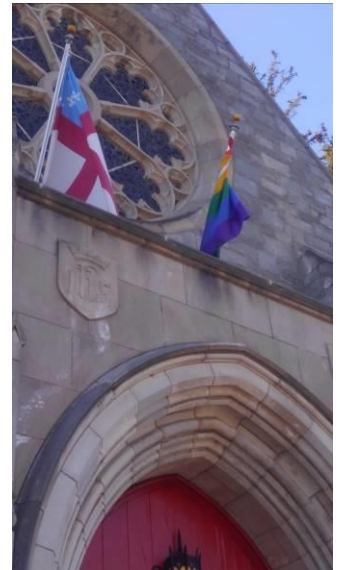
Yale Divinity School

～ウーマニスト神学

YDSでは最新のフェミニスト神学に触れられるのでは、という期待があったのですが、春学期に開講されていたのは「ウーマニスト(Womanist)神学入門」でした。黒人女性によるウーマニスト神学は、父権制的抑圧からの解放を求め、自分たちの経験は白人中流階級の女性の経験とは違う、黒人男性の経験とも違う固有の経験であるという立場から、批判的に築き上げられてきたものです。黒人女性は性差別、人種差別、階級差別という三重の差別にさらされている、と強調されますが、さらに今日では異性愛主義による差別(heterosexism)も視野に入れていることが示唆的でした。いつも半泣きでしたが毎回課せられる相当量の読書と学生の早口の議論に鍛えられて、少しは持ち帰れるものもできたように思います。公民権運動の高まりから50年あまりで、これほど多くの黒人女性神学者による学問的成果が蓄積されているのかと圧倒されましたが、あなたがたも日本でできることがもっとあるのではないですか、という問いかけ、励ましも感じました。

～多様性が大事にされる町

ニューヘイブンは Yale の大学町なので、中心部を占めるのは主に大学の壮麗な建物群ですが、各教派の歴史を感じさせる立派な教会も立ち並んでいます。この町を歩き回っていると、“Black Lives Matter”というスローガンをよく見かけます。これは 2012 年フロリダ州で Trayvon Martin というアフリカ系の高校生を自警団員が射殺した事件が発端となった社会運動で、黒人に対する暴力、ことに白人警官による無抵抗な黒人への暴力や殺害がなくなるように、「黒人の命も大切だ」と訴えるものです。これを「黒人の命だけが大切だ」という主張であるかのように曲解して、“All Lives Matter”、「すべての人種の命は等しく大切」と言うべきだとして対抗する人たちがいると聞きます。白人の命が尊重され黒人の命が軽視されてきた現実を踏まえずに、どの命も同等に大切だとあえて主張することは、問題のすり替えようであるように思われます。差別を是正しようとするとき、それまで優遇されてきた側にはこのような反応が起こりがちなのかもしれません。



風になびかない
レインボーフラッグ

ニューヘイブンのあるコネティカット州は典型的な「青い州」で、民主党の支持者が多く、思想的にも進歩的な土地柄。同性婚は合法で、「性的少数者」もそれほど少数ではないそうです。当地の聖トマス教会はレインボーフラッグを掲げています。私が定着した聖パウロ・聖ヤコブ教会の週報にはいつも“Diversity is not our idea, it is God’s idea” という標語が掲載されています。直訳すれば「多様性は私たちのアイディアではない、それは神さまのアイディア」ですが、「いろいろにしようと考えたのは神さまであって、私たちじゃない。本当にそうだな」と毎度感心しています。私たちは環境を破壊し種を絶滅させてきたけれど、創造のプロセスにはなにひとつかかわっていない。髪の毛一本も自由にできないのです。神さまがこんなふうになりたいと思って創られたものをそのまま受け取り大切にしないのに、規格に合わないなどとクレームをつけるのは妙な話です。

～この町に来て

こちらでは聖餐式のプロセッションを見ているだけで、いろいろな人種、ジェンダー、年齢、身体の機能の人たちがそこにいるのがわかります。いろいろ、ばらばら、でいいんだ～と思うと、同調圧力の強い日本にいるのとはまた違う心地よさを感じますが、この多

様性を尊重しようとする国においてなお、根強い人種差別に見られるような苦しみの種が尽きないことも知りました。それでも、日本から単身で来た私に「なんと勇敢な」と驚き？



テレサ先生とニューハイブン名物ピザ

学生も、先生も、教会の人も、町の人も、本当に親切にしてくれました。リス以外の友達もたくさんできて、あちこちで“Hi, Clara!” と声をかけてもらえるようになりましたが、会うは別れのはじめ。学期の終わりまでいられなくて残念ですが、まもなく荷物をまとめて帰ります。早く送り出し留守をカバーしてくださったみなさま、ありがとうございました。

(編集部注：吉谷かおるさんは3月末に帰国されました)

教役者コーナー

「違う」ということ

執事 マリア 越智容子（北関東教区）

執事按手を受けて早いもので、もうすぐ2年半になります。現在、栃木県と茨城の5つの教会を回りながら司式説教を担当しています。よくいろいろな方から「毎週違う教会で大変でしょう」とお気遣いを頂くのですが、大変なことは少しもなく、礼拝と交わりの中でたくさんの喜びと学びの時を頂いています。その中で感じていることは、違うことの豊かさの一つになって祈ることの喜びです。

違うことの豊かさの一つになって祈ること・・・というと、私は広島のカトリック幟町教会（平和記念聖堂）と平和記念公園で与えられた思いが心に巡ります。もう10年近く前になりますが仕事で広島を訪れた時、カトリック幟町教会の信徒である友人の案内で平和記念聖堂を見学し共に祈りました。聖堂の外装部分のコンクリートレンガは被爆者が水を求めて入った川砂を使って作ったものだそうで、聖堂内部の祭壇・パイプオルガン・ステンドグラス等の備品は、世界各国から平和の祈りと共に寄贈された物だそうです。また聖堂建築の折には国境や宗教を超えてたくさんの寄付があり、仏教関係者からも多くの浄財が寄せられたそうです。被爆された方々の痛みと苦しみを内陣の壁に描かれた「再臨のキリスト」が、癒しその涙を拭ってくださいますようにと祈りました。

その後、友人と別れ原爆資料館を訪れた後、重い心を引きずりながら公園内を歩きました。公園の木々は統一されておらず、一本一本種類も樹形も違い、とても個性的でした。

木々を見ながらふと、この地は世界中の国々の違った民族、違った文化、違った宗教の人達が「平和」という一つの思いを抱き、様々な形で祈る地であるのだと思いました。一本一本違う個性的な木々は、そんな様々な違いを持った人々の祈りと思いを吸い上げて、このように個性的な樹形に育ったのかもしれない…と思いました。そしてその思いと祈りが、この大地に刻まれた痛みを優しく包み込んでいるような気がしました。そして私の重く張り詰めた心も、ふと緩んで、大きな優しい祈りに包まれているような気がしました。

「違う」ということ。ともすればそれは排除を生み憎しみを生んでいきます。でも本当は「違う」ということは、とても素敵なことだと思うのです。地球上の様々な生き物や植物、私たち人間一人ひとりも「違い」があるからこそ豊かで、助け合うことが出来るのだと思います。平和への小さな一歩は、「違い」を神さまが与えてくださる豊かさとして喜びをもって受けとることであり、「違い」を持つ者同士がイエスさまが示された「枠を超える愛」のうちに助け合って生きることなのでは、と思います。「違い」を排除するのではなく、「違い」の中に神さまのギフトを見出すこと、それも平和への小さな一歩ではないか、と思います。

婦人伝道師シリーズ

ガーデンホーム ～共通の課題からの協働～

アグネス 北川規美子（大阪教区）

東京の中野区江古田にかつて聖公会の結核療養所「ガーデンホーム」がありました。この数年、その設立と働きにあった聖公会の宣教師と婦人伝道師の存在を知らされ、叱咤激励されるような思いでいます。

まず、私とガーデンホームの出会いですが、それは岡山の教会を訪れた時のことで、信徒の大森文太郎さんにお会いしたことからでした。吉谷かおるさんから「大森さんのお母さん、婦人伝道師だったんですって」という一言、早速お尋ねするとお母さんの名前は真瀬芙由（旧姓・ませふゆ）、大阪のプール女学院を卒業してから彼のお父さんと結婚するまで、ガーデンホームで働かれていたとのこと。わたしにとって初めて耳にする施設名、また婦人伝道師の名簿を見ても真瀬さんの名は見つからず、婦人伝道師の足跡を残す大切

さを更に深くしたときでした。その後大森さんから婦人伝道師の須田琴治、ミス・トリストラム、ミス・タブソンの名前をお聞きするなどしていました。

岡山での出来事と並行して、更にガーデンホームが身近に思えてきたのが、時々ナザレ修女会でお会いする桜井房江さんとのおしゃべりタイムでした。房江先生の名親が須田琴治さんであることを知ったのはしばらく後のことですが、ガーデンホームに関わる話のきっかけは、彼女の誕生時に母親が難産であったことからでした。主治医が子どもはあきらめるよう説得する中で、宣教師で看護婦であったミス・エバンスが出産をあきらめさせず、付き添い励まし続けられたことでご自分が生まれたことを話してくれました。ミス・エバンスは、房江さんのお母さん（兵頭ジョウ・結婚して松本）が函館伝道神学校を卒業した1908年、最初に婦人伝道師として働いたのが宣教師ミス・エバンスのもとで、任地は貧民街の医療伝道であったということです。そして房江さんの教母となったのがジョウさんの生涯の友であり、函館靖和神学校での校友だった須田琴治でした。またジョウさんの歩みをさかのぼると13才で函館靖和女学校で学び始めていますが、そこには函館で婦人伝道師の養成に力を注いだCMS宣教師のマリア・タブソンの働きがありました。

このマリア・タブソン、そして先のキャサリン・トリストラムが20年ほどを経た後、1923年創設のガーデンホームという献身的な働きの出発者、支え人となっていったのでした。ガーデンホームのトリストラムとタブソンは共に女子教育に献身したCMSの宣教師で、川口の居留地にあった普溜（プール）女学校に奉職しており、二人の来日当初の姿が『プール学院の110年』誌に見られます。

遠い英国より来日し、その人生を日本の女性たちの成長のために献げた宣教師たち、またその思いを引き継いだ女性たち。真瀬芙由と須田琴治の働きが関西と北海道という距離を超えてガーデンホームにあったことはとても不思議な思いになります。彼女たちに直接会ったことはありませんが、私にとっては先生であった房江さんと植松喜久江さんから、お二人もガーデンホームを訪れていたことや、兵頭ジョウ婦人伝道師のことを聞く機会があったことを改めて感謝しています。



■■■■■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑮ ■■■■■

今回は連載を休みます。

第26回聖公会「女性」フォーラム

テーマ：沈黙にふれて

ーイランカラプテー

(あなたの心にそっと触れさせていただきます。『萱野茂のアイヌ語辞典』より)

日 時：2018年7月15日(日)～7月16日(月・祝)

(受付／15日16：00～ 解散／16日16：00)

会 場：日本聖公会 札幌キリスト教会 (札幌市北区北8条西6丁目2-18)

地下鉄さっぽろ駅・JR札幌駅より徒歩10分

参加費：2500円＋食費2500円(15日夕食・16日昼食)

発題者：石原真衣さん 札幌市生まれ。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程在学。専攻は文化人類学。母方の祖母が平取町荷負(に)出身のアイヌだったが、アイヌ社会や文化と関わりを持たずに育つ。12歳の時に母から出自を聞かされた後もアイヌとの出会いや交流を持つ機会がなくアイヌの出自について沈黙しながら過ごす。アメリカ留学を経て英語の教員となるが、自己の出自に向き合わずに国際教育に携わることに違和感を感じるようになり、なぜアイヌの出自をもつ自分が沈黙するのか、そして、自己が携える喪失感の根源とは何なのかを明らかにするために28歳の時に大学院へ進学する。

【申込み締め切り】：6月15日(金)

【申込み先】「女性」フォーラム実行委員会 FAX 011-716-6345 (札幌キリスト教会)

大町美幸 coccosan61@gmail.com

※ 宿泊は各自でおとりますようお願いいたします。

※ 詳しくは、配布済みの案内文をご覧ください。

皆様のお越しをお待ちしております。



お知らせ 日本フェミニスト神学・宣教センター例会

5月12日(土)14:30～16:30

「憲法と平和 —Unheard or silenced voice (「声なき声」)を憲法は聞けるか」

斎藤小百合さん(恵泉女学園大学教授、憲法研究者)

7月14日(土)14:30～16:30

「ハンセン病とキリスト教」 浜崎真実さん(カトリック教会司祭)

9月8日(土)14:30～16:30

テーマ未定 山口里子さん(当センター共同ディレクター)

11月10日(土)14:30～16:30

テーマ未定 絹川久子さん(当センター共同ディレクター)

場所：日本キリスト教矯風会本部会館3階 (JR 中央総武線大久保駅北口徒歩1分)

参加費：1000円

* 参加出来ない方で講演録を欲しい方は、会員になってくださるとその都度お送りいたします。

(年会費 5000円)

* 例会は奇数月第2土曜日、14時半からです。



女性デスクから



- ◆第62回国連女性の地位委員会(UNCSW)/ACC 代表団会合(2018年3月12日～23日)がニューヨークで開催され、中村香さん(神戸教区)と安村妙さん(九州教区)のお二人が参加されました。今年の優先テーマは「農村漁村の女性・女兒のジェンダー平等及びエンパワーメント達成のための課題と機会」でした。会議のようとお二人の現地での活躍については、次号での報告を楽しみにお待ちしております。



- ◆今年、2018年は日本聖公会で初めての女性の司祭按手(1998年12月、渋川良子司祭／中部教区)が行われてから20年の節目の年になります。宣教に生きた先達女性の働きを記念し、これからも私たちがさまざまな場で生かされ、多様な働きをしていけるように、ともに祈りたいと思います。年内に20周年の感謝礼拝を計画していますので、詳細が決まり次第、お知らせします。
- ◆「女性司祭の実現に伴うガイドライン改訂の件」が「女性の聖職に関わる諸問題についての調整と検証・提言作成のための特別委員会」から議案として総会に提出されます。20年を経て、どのような内容の「ガイドライン」が提案されるのか、ご注目ください。



ジェンダープロジェクトより



女性デスクの吉谷かおるさんが3カ月の学びを終えてニューヘイブンから帰国されました。自分が行けなくても海外での情報を分かち合ってもらうことで、気づかされるが増えます。巻頭言にもあるように、日本では、多様性の尊重より同調圧力を感じる場面が今だに多いどころか、増えている気さえします。外見や能力は様々であっても、神さまの前では誰もが平等であることを今一度思い起こしたいです。7月に女性フォーラムが開かれ、日本フェミニスト神学・宣教センターでも定期的にプログラムが開催されます。日々の生活の中で、自発的に足をとめ耳を傾ける時間をもつことも大事にしたいと思います。

総会前日の夜に、祈り、お話を聞き、意見交換をする集まりのご案内

日本聖公会総会前夜の祈りの会

日本聖公会総会をわたしたちは注目しています



日時 2018年6月4日(月) 午後6時30分～8時30分

場所 目白聖公会 新宿区下落合3-19-4 (JR山手線 目白駅から徒歩約5分)

お話 吉谷かおるさん(管区女性に関する課題の担当者/女性デスク)

「女性デスク これからのチャレンジ」

日本聖公会で女性の司祭按手が行われてから20年、管区に「女性デスク」が設置されて12年になります。この間の女性の働きを振り返り、現在の課題を共有し、この先のチャレンジを考える機会をともにしていただければと思います。ことに今総会では「女性司祭の実現に伴うガイドライン改定の件」が議案として提出されます。私たちが希望をもって前に進めるように、心からの祈りをささげ、いまの思いを分かち合う時をぜひ一緒に。



主催 「女性」が教会を考える会(東京)

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。